

金峰山県立公園を巡る

熊本市、飽託郡、玉名郡にまたがり、有明海に面し気候が温暖なので果樹の栽培も盛んである。漱石の「草枕」で有名な峠の茶屋など史蹟や名所が多い。また、金峰山の山麓を「国民の森」としようという構想も進められている。



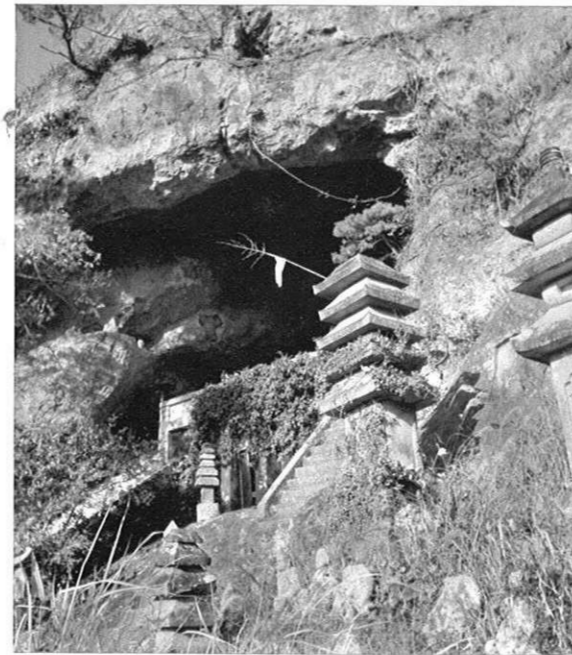
上・峠の茶屋附近……ここから金峰山への登山口がある。



上・ゆるやかな山麓地帯では果物がいっぱい。



上・金峰山への登山道路。休日には家族ぐるみの登山で賑う。



上・宮本武蔵がこもった岩戸雲巖寺(岩戸観音)



上・金峰山周辺の展望。

△ここに人あり▽

山に注ぐ愛情

□阿蘇郡一の宮町

幸 仁哉さん

「山は美しい。ことに冬山は素晴らしい。雪があり、霧氷があり、そこには少しの汚れもない。」山のことを語るとき、この人は実に楽しげだ。
幸仁哉さん、六九才。登山歴五〇年。その健脚は今も衰えを知らず、月に四、五回は山に登る。山を愛し、自然の美しさを愛するその人生は、いいかえれば、現在、幸さんが厚生省から退職されている自然公園指導員の役割りそのものだったともいえるようだ。

自然公園指導員として

自然公園指導員が、熊本県に誕生したのは昭和三十四年。その仕事は国立公園及び国定公園などの利用に精通し、かつ自然を愛護する者の立場から、風景を保護し、利用の適正、とくに動植物の愛護環境衛生の維持並びに事故の防止について利用者の指導を行なうもので、任期は二年。現在、県下には阿蘇に一〇名、天草に四名の指導員がいる。

この制度が発足すると同時に厚生省は幸さんを指導員に依頼した。というのも国立公園管理員の金原厚生技官がいうよ

うに「指導員という肩書きそのものは、一つのアクセントにすぎない。指導員の行為を通して、自然愛護の風潮を、個人的に、あるいは職場のグループの中に、知らず知らずの内に植え付けていく、それが本来の役割り」とする指導員の性格に、幸さんは、まさにうってつけの人だからである。

「登山は楽しく、安全に」をモットーに

阿蘇の山々の中で、幸さんの名前を知らぬ者はまずいない。幸さんの根子岳、高岳の登山は一〇〇回に近い。本格的な山登りは、鹿本中学四年の時の阿蘇登山にはじまるという幸さんには、山についての思い出も多い。

なかでも、昭和二十五年から昨年退職するまで、一六年間の阿蘇高校在職中に残した足跡は大きかった。二十七年に阿蘇高校に登山部ができること、顧問として土曜、日曜はもちろん春、夏の休みには、阿蘇の山々をはじめ、祖母山へ、九重連山へと幸グループの登山が続いた。こうした登山を続ける内、幸さんは三十五年に根子岳に新しいルート「見晴らし新道」を開発した。ルートの開発と簡単にいっても、大変な仕事である。登るだけでも苦しい山坂を、阿蘇高、阿蘇農の登山部員たちも協力して、道標を肩にかつぎ、草を切払いながらの苦勞の末によくやってくれたルートだ。このほかに道標の設置、安全路確保のための鉄線張りなどなど、幸さんの努力は数えていっただりがない。これらは、全て後から登る

人のための奉仕作業である。

幸さんの薫陶を受けた、阿蘇高校の女子登山部は昨年の国体で見事優勝の金の射とめる迄に成長した。幸さんの嬉しい思い出だ。しかし、一六年の間、生徒の登山に一度も事故がなかったことが何よりも嬉しかったという。「登山は楽しく安全に」をモットーにする幸さんは生徒の岩登りは絶対許さなかった。幸さんが阿蘇高を退職する時、

幸さんの登山の指導と山の愛護に尽した功績に対し、県高体連は異例の表彰で報いた。

山を守る緑の腕章

山を愛することにかけては、人一倍の幸さんだけに、マスコミ的な登山者や観光客によって、美しい自然が汚されていくのを見るのは、何んとも堪えられない思いがするという。「あなたが来るまではきれいでした、といわれたいようにする自覚が欲しいですネ。」という幸さんは、どの山に登るにも、必ず自然公園指導員の腕章をつけていく。子ども日本の公園だぐという意識。それに登山客が、その腕章を見ることが出来る有形無形の効果も狙いである。

